

# 都市景観を創造 県都のシンボル・昭和館

栃木県立博物館 主任研究員 小柳 真弓



風格と重厚感のただようファサード(正面外観)

宇都宮市中心部、美しいマロニエの並木をくぐり抜けると、地上15階・地下2階建てのスタイリッシュな県庁舎が姿を現す。内装や外構に大谷石・烏山和紙・葛生石灰のフレスコ・益子陶壁などをあしらひ、豊かな県産材の魅力を内外に発信する役目も担う建築物だ。この県庁舎の東に静かにたたずむのが、昭和13(1938)年竣工の4代目県庁舎本館を部分保存した「昭和館」である。3代県令三島通庸関わった2代目庁舎は明治21(1888)年、失火により焼失。宮廷建築で名高い片山東熊設計の壮麗な3代目庁舎

も、昭和11(1936)年に火災で失われた。関東大震災の影響で耐震・耐火が求められたこの時代、4代目県庁舎には鉄筋コンクリート構造が採用されている。

折しも昭和12(1937)年には日中戦争が勃発。物資や資金、労働力にまで国家統制が及ぶ時代を迎えようとしていた。そのような中で、県民の寄附金や無料奉仕活動など多くの支援を得て完成した。青年団が工事に必要な砂利や玉石などを鬼怒川河川敷から調達したという逸話も残る。こうした県民の協力もあつて完成した県庁舎は、太平洋戦争末期に宇都宮

を襲った苛烈な空襲でも奇跡的に大きな被害を受けないことなく、戦後も長く県の顔であり続けた。

この風格と重厚感を感じさせる県庁舎を設計したのは、早稲田大学大隈講堂や日比谷公会堂・市政会館、群馬県・宮城県庁舎などの建築に携わった小金井(現下野市)出身の建築家・佐藤功一である。講堂や政庁だけでなく住宅の設計も手がけていた彼は、音響や採光など内部環境の快適さ



佐藤が好んで取り入れた、ルネサンス様式のアカンサスの葉の装飾

にこだわり、また、国産木材の質の良さに注目して積極的な使用を推奨していた。陶芸を愛し書画や句作を嗜むなど当時一級の文化人としての一面も持ち、日光出身の画家小杉放庵らと親しく交流したことも知られている。

住宅における「住みやすさ」を追究していた佐藤は、庁舎建築にもその考えを取り入れようとした。各居室の窓が東南を向くように配置された「寄せ廊下」の構造がそれを物語る。もうひとつ佐藤が重視していたのが、都市景観における「街路に立つて見るとの美観」である。県庁舎に向かう折にはぜひ、並木の下、シンボルロードを歩いてみていただきたい。今もなお色濃く残る佐藤の理念を、景観の中を感じる事ができるだろう。